片倉氏に、濫りに白石城主などと冠することは許し難い誤りである。〕第2代重長に実子がなかったので、外孫三之助〔松前市正安広の子〕を養嗣とし、片倉家第3代当主とした。萬治2年〔1659〕江戸小石川堀修理の事〔伊達家第3代綱宗隠居の原因の一つとなった〕を司り、幕府から白銀100枚、時服10領を賜わった。寛文7年〔1667〕伊達家第4代綱村が元服する時、景長が加冠した。ついで奉行となり、天和元年〔1681〕5月24日歿、享年52刈田郡蔵本村愛宕山下に葬る。その女松子が、御一門宮床伊達肥前宗房の夫人となり、伊達本家第5代吉村を生んだ。

「片倉家系図」　景綱―重長―景長―村長―村休―村定―村廉―村典―景貞―宗景―邦憲―景範―景光。

代々通称小十郎。

注(4)　P.174の注(4)参照。

注(5)　P.118の注(1)参照。

注(6)　P.110の注(4)参照。

注(7)　語学書。5巻。越谷吾山著。安永4年〔1775〕序。天地・人倫・草木・気形・器用・衣食・言語の7部門に分け、日本全国の方言を収集し、古書を引いて考証を付した辞書。

資料　仙台市史（明治41年版）

和名類聚抄（源順）

古語大辞典（中田祝夫等）

物類称呼（越谷吾山）

大言海（大槻文彦）

96.「群山」の読み

問　短歌の同人誌「群山」の題号の読みは「むれやま」でしょうか。

答　「群山」は、東北アララギ会の短歌誌として、仙台市に発行所を置き、昭和21年7月20日創刊、以来月刊で今日まで継続発行されているもので、その題号「群山」の正しい読み方は、「むれやま」ではなく「むらやま」であります。「群山」発刊の言葉が、創刊号の前扉に次のように記されています。

『短歌に対する吾々の愛着はすでに本態的であり、生活の中に深く根ざしてゐる。如何なる時代、環境にあってもその真実純粋なる詠嘆は、人間本然の叫びとして蔽はれることなく表白された。戦ひの

不幸なる結末によって、現在急角度の転換がなされつつあるが、如是の変革をして自主的に意義あらしめ、日本再建の途を拓くべく、今後の文化、道義の向上発展に、短歌の担ふべきところまた極めて大きい。現実の苦渋混迷は現実の根本を直視し、把握することに依ってのみ超克され得る。吾々の短歌が現実と生活とに堅実なる基盤を有してゐることは、この意味に於いて限りない悦びでなければならない。吾々作歌者は、短歌の伝統的本質に立って正しい方向に不断の謙虚な歩みを続けて行くべきであろう。

吾々のアララギは不易と流行[(1)]との面に於いて、常に日本文芸の主流をなし、且前進的な役割をはたしてきたが、今後といへども絶えず進展[(2)]して行くべきは素より否むことはできない。ただ狭隘なる紙面の制約は膨大なる会員の作品を収載する餘地を有しない現状である。かかる窮状を打開し、さらにアララギ文化の地方的強化を計らむとしてここに東北アララギ会を結成し、歌誌「群山」（むらやま）を発刊して会員全体の真摯なる研究室たらしむると共に、新しい文化運動を実践展開することとした。ただ現在の情勢よりして用紙、印刷その他すべて困難なる条件の下にあり、並々ならぬ難航を思はせるが、諸氏の熱意と協力とによって、アララギの生命をこの東北の地に燃え立たしめたい念願である。素朴重厚なる東北の地方性を生かすと共に生新にして自由なる作歌行動に精進し、会員相互の発展を期したいと思ふ。』以上の中で、歌誌「群山」の題号の読みを「むらやま」と明示してあるのです。

なお、「群山」とは、むらがっている山、多くの山のことで、短歌などの用語としても多用されています。例えば「万葉集」巻1の第2の歌に、〔佐々木信綱編、「新訂新訓万葉集」〕『大和（やまと）には群山（むらやま）あれどとりよろふ天（あめ）の香具山（かぐ）[(3)]登り立ち国見[(4)]をすれば国原（くにはら）は煙（けぶり）立ち立つ海原（うなはら）はかまめ立ち立つうまし国ぞあきづ島大和の国は[(5)]』（高市岡本宮御宇天皇代〔たけちのおかもとのみやにあめのしたしらしめししすめらみことのみよ〕息長足日広額天皇[(6)]〔おきながたらしひひろぬかのすめらみこと〕天皇香具山に登りて望国[(7)]〔くにみ〕しましし時の御製の歌）とあるなど、その一つです。「むら」[(8)]〔群・叢・簇〕とは「むれ」の古形で、群がること、またそのものをいう日本語なのであります。

注(1)　正岡子規没後、その門人らが根岸短歌会の機関誌として「馬酔木」〔あしび〕を、ついで「アカネ」を刊行、明治41年10月千葉県の蕨真〔わらびまこと〕により「アララギ」創刊、翌年9月から東京に移し、伊藤佐千夫を中心にこれに拠る。佐千夫生前から斎藤茂吉・古泉千樫ら編集、大正3年から島木赤彦が中心となり、赤彦没後、茂吉・土屋文明ら編集、大正・昭和を通じて歌壇の主流となっている。

注(2)　不易流行。ふえきりゅうこう。芭蕉俳諧の術語。不易は詩的生命の基本的永遠性の体。流行は詩における流転の相で、その時々の新風の体。この二体は共に風雅の誠から出るものであるから、根元においては一に帰すべきものであるという。

注(3)　P．195注(8)参照。

注(4)　香久山とも表記。奈良県磯城〔しき〕郡香久山村にある山。耳成山〔みみなしやま〕・畝傍山〔うねびやま〕と共に大和三山と称する。樹木繁茂して美しく、麓に埴安池〔はにやすの

いけ〕がある。天香久山、歌枕。

注(5)　国の形勢を高い所から望見すること。

注(6)　秋津洲・秋津島・蜻蛉洲。日本国の異称。神武天皇が大和国の山上から国見をして「蜻蛉〔あきづ〕のとなめせるが如し」と言ったという故事による。「となめ」とは後嘗〔あとなめ〕の略で、蜻蛉〔とんぼ〕の雌雄が交尾して互に足をふくみ合い、輪になって飛ぶこと。「あきつしま」はまた、大和国の異称。

注(7)　第34代舒明天皇。忍坂人大兄皇子の王子。西紀629年即位。飛鳥岡本宮に都。在位13年で崩御。593～641。

注(8)　「むら○○」型の日本語に、「むら」（村。人が群がり住んでいるところ）・「むら菊」・「むら雲」・「むら草」・「むら松」・「むら声」・「むら雨（さめ）」・「むら時雨（しぐれ）」・「むら薄（すすき）」・「むら雀」・「むら苗」など数多くある。

資料　群山第1巻第1号（東北アララギ会群山発行所）

97.　「言い訳の楓」とは

問　「言い訳の楓」とは、何処にあって、どのような由来のものか。

答　伊達家第4代綱村(1)が、生母三沢初子(2)が生前護持した釈迦像を安置し、母の冥福を祈るとともに、その功徳を衆人にあまねく及ぼすため、元禄8年〔1695〕、城下東郊榴岡(3)に地を選び釈迦堂(4)を建立しました。そして、その境内を庶民遊楽の地とするため、京都清水から1千本の枝垂桜を取り寄せて栽えたといわれます。この桜は、当地ではかって見られなかった珍種だったので、植え立てに従事した足軽組頭某(5)が、1本だけ失敬して持ち帰り、自宅の庭に栽えてしまったということです。作業が完了して本数検査が行われることになったので、その足軽組頭は、手近にあった楓を1本引き抜いて行って、土手の上に植え、咄蹉の言い訳の気転で員数調べの関門をパスしたという話が伝わっています。この時の楓は、榴岡南端の土手の上に残っている老木で、「言い訳の楓」であるといわれてきました。

「言い訳の楓」について記されたものは、下記の通りです。

1.　「仙台郷土史夜話」（三原良吉）

『武家屋敷の庭樹―言いわけのモミジ

馬場の堤に桜だけを植えることは将軍家に限られた格式であったが、伊達政宗(6)が追回しに馬場を設けた時、それを知ってか知らずか、桜だけをうえて桜の馬場と称した。これが幕府の隠密〔おんみつ〕に見つかって報告されたため、公義〔儀〕からおとがめを食った。政宗ちっとも驚かず、松と